

縄文時代のお魚事情

とておき埋文講座

魚津水族館 館長 稲村 修 学芸員 不破 光大

はじめに

魚津水族館は富山県唯一の水族館として富山の水生生物を調査研究し、展示等を行っています。先日、旧知である河西健二所長から「小竹貝塚からたくさんの魚類の遺物が出ているが、現生の富山湾の魚と比べてどうなの?」ということで、講演の依頼がありました。

そこで、令和2年10月15日の第33回全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会では、「小竹貝塚出土の魚類遺存体からみえること」と題して不破がお話ししました。また、11月8日には「縄文時代のお魚事情」という河西所長からいただいた題で稻村が一般講演させていただきました。

講演等に用いた資料は「公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所(2014) 小竹貝塚発掘調査報告—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告X—第二分冊. 自然科学分析編」で、「18脊椎動物遺存体」の「(2)魚類:P228-233」です。

報告書では小竹貝塚の特徴を「ヤマトシジミ主体の二枚貝類が大量に廃棄され、貝層の厚さ2m超の日本海側最大級の貝塚」としています。魚類の遺存体としては、歯、骨、棘等の硬組織が出土しています。大きいものは肉眼で確認し、小さいものはフルイ(網目:5、4、2.5、1mm)で採取されました。出土総数29,682点中の17,654点で、魚の種類が同定されています。

分類について

出土の魚類遺存体は種まで特定されている魚が多いのですが、亜綱や科名、属名までのものもあります。魚類の分類は生物分類体系に則り、原則として「界・門・綱・目・科・属・種」の順に分けられますが、これらのはかに「亜綱・亜目・上科・亜科・亜属・亜種」等の中間的な分類群もあります。

魚類を含む動物の名前は国際動物命名規約に則って、世界で一つだけの学名が付けられています。その他に日本では和名がありますが、図鑑等多くの場面で使われるのは標準和名で、各地方での呼び名は地方名とか方言名とされます。さらに、成長によって名前が変わる出世魚の例もあります。

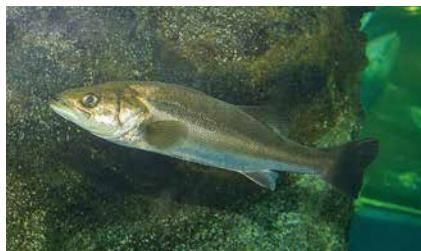
さて、分類体系をマダイの例で表すと以下のようになります。

界 : 動物界 Animalia
門 : 脊索動物門 Chordata
亜門 : 脊椎動物亜門 Vertebrata
綱 : 条鰓綱 Actinopterygii
目 : スズキ目 perciformes
科 : タイ科 Sparidae
亜科 : マダイ亜科 Pagrinae
属 : マダイ属 pagrus
種 : マダイ Pagrus major
(Temmink et Schlegel, 1843)
標準和名 : マダイ 地方名 : アカダイ
英名 : Red seabream

小竹貝塚から出土した魚類

小竹貝塚から出土した魚類遺存体(17,628個)の分類別割合について報告書では「①スズキ属(17%) ②クロダイ属(16%) ③マダイ(7%) ④タイ科(13%) ⑤フナ属(8%) ⑥コイ科(11%) ⑦サケ科(5%) ⑧エイ・サメ類(5%) ⑨ニシン科(5%) ⑩カタクチイワシ(1%) ⑪フグ科(4%) ⑫アジ科(1%) ⑬サバ属(3%) ⑭その他(4%)」としています。ここで挙げられた魚類について、現在の富山の淡水魚相や富山湾の魚類相を加味して検討しました。

①スズキ属



スズキ

現在の富山湾ではスズキが多く、沿岸海域のみならず、河口や河川下流域を好むことから、汽水域が広がる小竹貝塚周辺でもスズキが多く捕獲された。

②クロダイ属

現在の富山湾沿岸海域にはクロダイが多く、河川内にも進入する。小竹貝塚周辺には汽水域が広がり、多くのクロダイが捕獲された。

③マダイ

スズキやクロダイと異なり、やや深場に多いことから、沖目の海域で舟を使って漁獲していたのだろう。

④タイ科

クロダイ、マダイ以外のタイ科ではクロダイ属、マダイ、チダイが記されている。考えられるのはキダイ、ヘダイくらいだが両種とも少なく、どの種なのか疑問が残る。

⑤フナ属

富山県に多く生息しているギンブナと思われる。

⑥コイ科

現在はユーラシア大陸から導入された「コイ飼育型」が全国的に分布し、日本在来の「コイ野生型」は富山で確認されていない。出土品はコイ野生型と推測され、縄文時代に富山県に生息していた証拠となり大変興味深い。

ほかにウグイ属のウグイとジュウサンウグイ(旧名マルタ)や、タナゴ類ではミナミアカヒレタビラ、ヤリタナゴのほか、かつて放生津潟に生息していたイタセンパラがある。その他は、在来種であるタモロコ、モツゴ、アブラハヤ、タカハヤ等の小型コイ科魚類とみるのが妥当である。

⑦サケ科



ヤマメ

椎体が大型のサケ属が出土しており、サケやサクラマスであろう。また、報告では「大型のサケ属以外にアマゴ（サツキマス河川残留型）やイワナが含まれる」とあるが、アマゴの分布域でないことからヤマメ（サクラマス河川残留型）と考えられる。

⑧エイ・サメ類

現在、トビエイ（上）科は南方系のトビエイとイトマキエイの記録はあるが珍しい。ネズミザメ科は定置網などでホホジロザメ、ネズミザメ、アオザメが捕獲される。しかし、歯が鋭く、力が強いサメ類を釣るには強力な針と糸が必要で、当時の漁具が気になる。

⑨ニシン科

富山湾のニシン科にはマイワシ以外で、ウルメイワシ、サッパ、ニシン、コノシロが知られる。ウルメイワシは春先に捕れるが比較的沖合である。一方、コノシロは、沿岸海域や河口・河川下流域で、大きな群れになって表層近くを泳ぐので小竹貝塚周辺にはたくさんいたはずである。

⑩カタクチイワシ

沿岸海域に多く生息し、大きな群れを成す。群れで海岸に打ち上がることがある。

⑪フグ科

フグ科は富山湾では19種が知られ、沿岸域に生息するショウサイフグ、クサフグ、コモンフグ、マフグ、ヒガソフグ等は簡単に入手できたであろう。ただ、これらフグ類の筋肉以外は有毒なので、死亡した人もいたであろう。

⑫アジ科

ブリ属（ブリ、ヒラマサ、カンパチ、ヒレナガカンパチ）以外に、多くのアジ科魚類（マアジ、マルアジ、メアジ、ツムブリ等）がいる。マアジは沿岸海域にたくさんいたはずである。

⑬サバ属

富山湾では主に冬から春がマサバ、冬にゴマサバで、マサバが多い。足がはやいので傷みやすく、体质により中毒になる。

遺存体の出土数が少ない魚類

遺存体として出土しているものの、現在の魚類の状況から考えると量が少なく思える魚種として、「トゲウオ科、ボラ科、コチ科、ブリ属（アジ科）、イシダイ属（イシダイ科）、ソウダガ

ツオ属（サバ科）、マグロ属（サバ科）、カレイ科、カワハギ科」があります。

これらの中で、例えばボラ科を取り上げると、富山湾ではボラ、メナダ、セスジボラの3種が生息していますが、セスジボラは稀で、ボラとメナダは淡水・汽水・沿岸海域に大量に生息しています。小竹貝塚周辺にいたはずで、大きさも50cm以上になる魚なのに、大量に出土しないのは不思議です。ちなみに現在、富山県ではあまり食用とされませんが、石川県ではこれを捕獲する漁が知られています。

また、アジ科ブリ属のブリ、ヒラマサ、カンパチですが、中でもブリは富山湾を代表する海の幸です。秋には若魚であるツバメソ（コズクラ）、フクラギ、ハマチ（ガンド）が大量に漁獲され、大型のブリは冬に漁獲されています。これらの出土が少ないので不思議で、「当時は少なかった」とか、「冬は漁ができなかった」とか、どのような理由があったのか気になるところです。

さらにカレイ科魚類は富山湾で18種の記録があり、沿岸海域ではマコガレイ、マガレイ、メイタガレイ、イシガレイが多く、当時も浅場の砂地に多くいたはずなのですが、出土しないのは不思議です。

魚類遺存体の種名表を見て思うこと

小竹貝塚で出土した魚類を考察していく、心に浮かんだ疑問です。

1) 当時の環境は？（温暖化：気温、水温、川の流れ、海流等）

これに関連して、「現在、なぜ富山でヤマトシジミが捕れないのか」という疑問が出てきた。現在のヤマトシジミの生産地は日本各地にあり、温暖化の影響ではなくて、汽水湖が無くなつたことが主因と考えられる。

2) どうやって捕まえていた？（手づかみ、釣り、網漁等）

出土した魚種から採集方法を想像してみた。河川では釣りやカゴ等を用いて捕獲。夏期なら、潜水してヤスで突くとか、川の瀬替えをしたかも。沿岸海域では潜水して鉛で突くとか、釣り（釣針は出土）のほかに、丸木舟で沖に出て釣っていた。これら漁法で使われた針、糸、網、餌等に興味が湧きたてられる。

3) どうやって食べたのだろうか？（生食、焼き物、煮物、干物等）

明確な証拠はないが、焼いたり煮たりしたことは想像に難くない。当時、塩は入手可能と考えられるので、現在の東南アジアの状況から推測すると、干物のほかに、魚の塩漬けを作り、発酵させて魚醤を作った可能性もあり、うまい煮魚であったかもしれない。

なぜか、小竹貝塚から出土しない魚

現在は身近にいるのに、小竹貝塚から出土記録のない魚をいくつか紹介します。

まず淡水魚では、カンキョウカジカやアユカケというカジカ類は、神通川下流域にいたはずです。またドジョウはカゴ漁でフナ類と一緒に捕れたと思います。そしてハゼ類のマハゼは、川でも海でもたくさんいたはずです。

海水魚では、浅い沿岸海域の砂地に多いシロギスやアカエイは、河口周辺にも多くいたと思います。アカエイの尾にある毒針は鋭く、鉛の先に使えそうですが、出土していません。また、沿岸の岩礁域にはメジナやカサゴがたくさんいたはずなのに、出土していないことも不思議です。



アカエイ

おわりに

以上のように、小竹貝塚から出土した魚類の遺存体を、現生の富山湾の魚類相をもとに考察してみました。当時の魚類相や生存量が現在と異なるのか、どのように漁獲していたのかなど、新たな疑問が多く出てきました。これは、今後の楽しみとしておきます。

（令和2年11月8日

第4回 県民考古学講座）